

## ロッキード献金事件

# 第二次証人喚問

連日、ロッキード事件の抗議集会が開かれている。児玉事務所や小佐野事務所でピーナツを投げつける主婦たち。一向にはれぬロッキード献金事件に国民の不信感はつのるばかりだ。3月1日、国会では第二次証人の喚問が行なわれた。しかし証人たちは例によって“知りません”“忘れました”の一点張り。23年ぶりの証人対決となった若狭全日空社長と大庭前社長。大庭前社長は『私はDC10を導入するためダグラス社とのオプション契約にサインした。その善処を若狭社長にひきついだ』と午前中の証言を繰り返し、一方若狭社長も『全く聞いていない』と反論。真実は誰れが知っているのか、全日空のエアバス導入をめぐる疑惑は一段と深まるばかりだ。

# ダム建設のかげに

## — 神奈川・山北町 —

神奈川県の西部、丹沢の山奥に近代工法の粹を集めて建設中の三保ダム。昭和45年神奈川県企業庁の計画で着工されたこのロックフィルダム、現在全体の1割程度が完成した。ダム建設には騒音公害、移動問題とトラブルも多い。

ダムが建設されるたびにいくつかの部落が消えていく。幾歳か長い間、培れてきた人々の生活が断ち切れ、やがて湖底に沈むのを静かに待つ跡地、家主を失い、荒れほうだいの家、この水没する山北町世附（よずく）地区を中心に7集落223世帯の移転問題は史上最高といわれる札束攻勢で解決した。

だがダム建設予定地から少し離れたため唯一の交通機関だった路線バスまで廃止され、より劣悪な生活を強いられている村がある。11世帯39人の住む浅瀬地区の一部である。消防団、商店、駐在所の移転と共に子供たちの通いなれた学校も移転し、残された校舎は資材置場になった。生活の基盤となるものはいっさい奪れた。祖先の霊が眠る墓までも掘り起されて無残な姿を見せている、死んでも行く所がないという。村人たち39人は浅瀬少数残存者連盟を結成し「奪われた日常生活に水没者なみの補償を」と県に再三交渉してきたが解決を見ず、昨年11月11日からダム工事現場近くに闘争小屋を作り工事車阻止の実力行動に出た。この闘争も（先月で）百日目を過ぎた。

「要求が入れられるまでは実力行動を止めない」と雨の日も休まず徹底抗戦のかまえは変えない、しかし横断幕、スローガンのもと、タスキ姿で訴える人々の姿は悲壮感にあふれる。バスも通わぬ文字通りの“陸の孤島”に追いやったのは水ガメという大義のためのダム造りにある。友達も多くを失い、親たちを闘争に奪われた子供たちのためにも一日も早くこの問題を解決しなければならない。